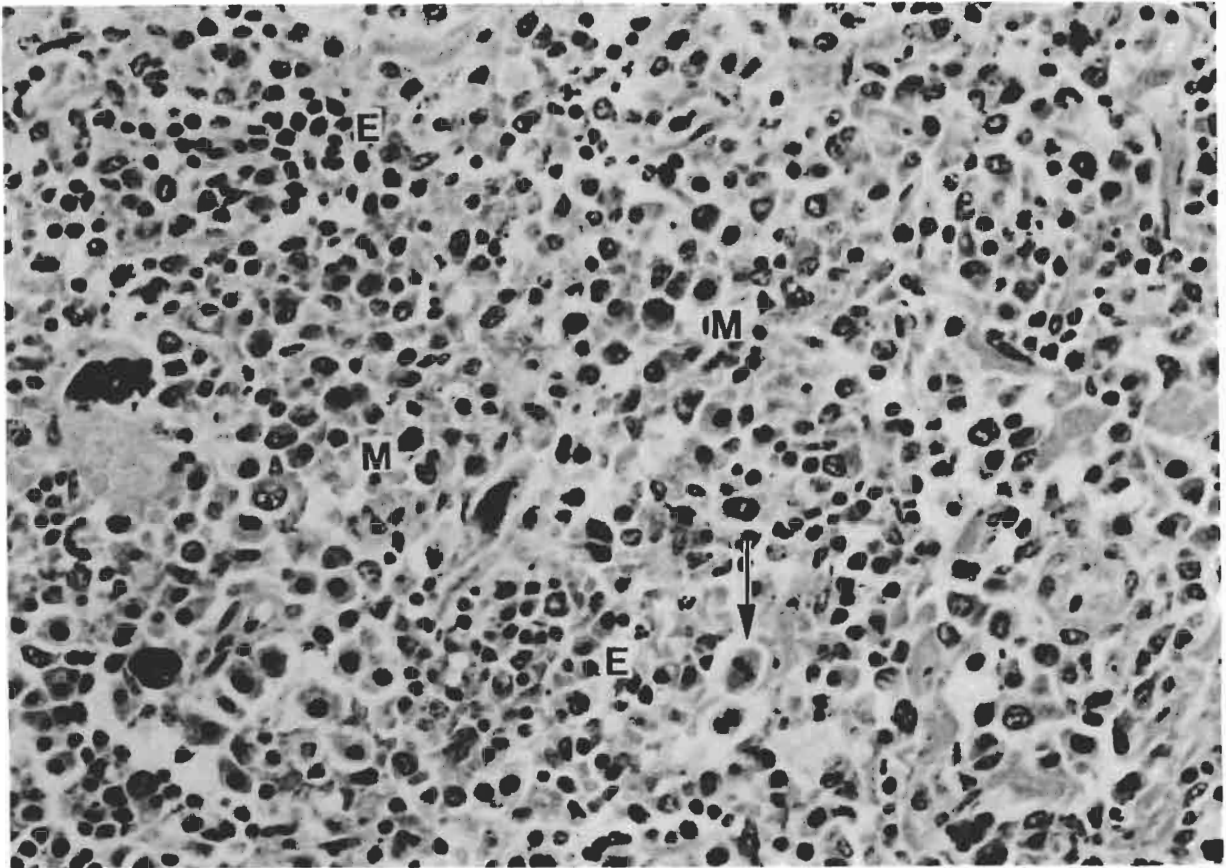


牛の脾臓

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.522



動物：牛，ホルスタイン，雌，3歳。

臨床的事項：昭和63年5月4日食欲不振とのことで診療を受けた。元気食欲はなく、可視粘膜は貧血し、削瘦著しく、骨髄細胞様異常細胞を認め白血病を疑ったが、体表リンパ節の腫脹や眼球突出、あるいは直検による異常も認められなかった。翌日、起立不能に陥り、予後不良として5月11日に剖検された。剖検時の血液検査では、赤血球数は $461万/mm^3$ 、赤血球の大小不同、多染性を認めた。白血球数は $3,600/mm^3$ で、特に好中球の減少が見られ、核の左方移動を認めた。

剖検所見：脾の腫大(2.5kg)及び全身各所血リンパ節の腫瘍性腫大。大腿骨骨髄における高度腫瘍浸潤。全身各所リンパ節の腫瘍性腫大及び皮質部類白色巢。肝臓、心臓、腎臓における腫瘍浸潤。第四胃粘膜における潰瘍及び糜爛。

組織所見：脾の赤脾髄では巨核球が散在し、骨髄性造血細胞の各分化段階における瀰漫性高度な細胞増殖が認められ、小型濃染核をもつ正赤芽球をはじめ前正赤芽球、原始赤芽球などの赤芽球系細胞集簇(E)が見られ、核分裂を示すものもあった(矢印)。細胞質が瀰漫性弱好

酸性ないし好塩基性に染まる骨髄芽球をはじめ、胞体に顆粒をいれ大型円形核を持つ前骨髄球などの顆粒球系細胞(M)が島状に群在して見られた(図、H E染色、 $\times 445$)。リンパ小節は概して小さいが、一部のものは胚中心を形成し、脾洞においては赤芽球とともに骨髄系の細胞をいれていた。同様の髓外造血は一部のリンパ節や血リンパ節においても観察された。

その他、骨髄においては高度のリンパ球性腫瘍細胞の増殖により骨髄腔が満たされ、また、同様の腫瘍細胞浸潤は肝の小葉間結合織及び被膜下、腎の皮質、左心房、乳腺、全身各所リンパ節の傍皮質領域及び血リンパ節などにも認められた。

組織学的診断：以上の所見により本病は散発性子牛型牛白血病と診断された。また、本例の脾臓の変化は、骨髄における腫瘍細胞の浸潤、増殖により骨髄組織が腫瘍細胞に置換され、骨髄の造血阻止の結果起こった二次性のもと考えられた。したがって本例の脾臓を“(子牛型白血病における骨髄の腫瘍性増殖による骨髄機能低下に基づく)脾の骨髄化生”と診断した。